

マンホールの下に光を

長考一番

山中季広
コラムニスト



インダス文明を代表する遺跡といえばモヘンジョダロだろう。下水道網が整った都市で、排水はきちんと浄化してインダス川へ流した……。

世界史の授業でそう習ったとき、私は古代インドの人々に対する「やられた感」に沈んだ。当時暮らした三重県の山村に下水道はまだなかった。

「たしかにモヘンジョダロの下水道は先駆的です。浴室や水洗トイレもあり、排水溝は焼きレンガで守られています」

そう話すのは鶴見大教授の上杉彰紀さん(53)。インドやパキスタンに通うこと50回以上、通算15年も遺跡を調べた。

モヘンジョダロが繁栄したのは、一説に紀元前2600～1900年ごろ。なぜ測量や排水技術が発達したか。後に都市ごと衰えたのはなぜか。いずれも未解明という。

その後、中世の欧州などは排水に関心を払わなくなる。汚水は平然と道や溝に捨てられた。

モヘンジョダロにたちうちできそうな町を日本で探すなら、たとえば16世紀末の大坂あたりか。先見の明があったのは豊臣秀吉である。巨大な城を築くと同時に下水溝を掘りめぐらせた。

のちに「太閤下水」と呼ばれるこの水路は、治世が徳川に移ると石垣で補強された。「感心するのは町衆が毎春、『水道さらえ』という清掃を続けたこと。補修費用も町衆が出し合いました」と元大阪市建設局職員の前口俊二さん(67)は話す。明治以降も補修や補強がされてきたという。

いまも日常の用に供されている区間を坂口さん

の案内で見学した。地下溝を走る薄黄色の濁流を間近で見ると、秀吉の構想した都市インフラが令和のいまも機能していることに感じ入った。

その足で向かったのは埼玉県八潮市。1月に道路が陥没し、車が地中に落ちた現場だ。破損したのは稼働42年という大口径管。流域に市と町は12もあり、県民120万人が影響を被った。

住民のひとりには「洗濯や入浴を控えるよう県から言われ、困りました」とふりかえる。「下水なしでは暮らせません」

管路工事大手の管清工業(東京)専務の伊藤岩雄さん(69)によれば、いまの下水道の多くは昭和後期に公害対策で集中的に整えられた。「耐用年限が一斉に迫る。放置すれば、八潮のような事故が群発しかねません」

ふと考えたのは、私が出所や浴室、トイレから流す雑排水の行方。毎日何の考えもなくザーザー盛大に流しているが、こ

の先も大丈夫だろうか。

自治体ごとに「下水道台帳」が公開されていると聞き、東京都庁27階を訪ねた。わが家から出た排水は、踏切の真下を横切り、国道の地下を抜け、処理場で浄化されて神田川から東京湾へ。実に30キロもの長旅をしていた。途中、何力所も標準耐用年数の50年を超える老朽管を通過していた。

思えば、これまで私にとって下水道は流せて当たり前のも。壊れたら役所が補修してくれるものと決めつけていた。

だが自治体頼みのいまの制度は限界に近い。老朽管は増え、技師は減り、人口減で財源も細った。所管の国土交通省では、下水道と上水道の運営を統合するなど根本的な案を検討中と聞く。

水を流さずに生きられないのは、モヘンジョダロの古代人も私たち現代人も同じ。マンホールの下に思いを致すことなくノホホンと排水してきたわが身を深く反省した。